

〈研究動向と展望〉

国語教育学の研究動向と展望

— 全国大学国語教育学会『国語科教育』掲載論文を中心に —

広島大学大学院教育学研究科 山元隆春

本稿では、全国大学国語教育学会誌『国語科教育』に掲載された1998年から2002年までの論文を中心として、国語教育学の研究動向を把握し、研究の展望を行った。研究動向の特徴としては、1) 国語教育史の研究においてリテラシー形成過程の史的研究の蓄積が見られること、2) 比較国語教育学において記述研究だけでなく「比較」研究への足がかりが認められること、3) 授業研究・教師研究・学習者研究・発達研究それぞれについて実証的な研究方法の開拓がおこなわれたこと、4) 国語科における教材価値についての吟味・検討が進められたこと、5) リテラシーを育む足場として国語科カリキュラムの構成原理を迫る研究が進められたこと、等をあげることができる。蓄積された研究成果を国語科の教員養成・教師教育カリキュラムに反映させることと、カリキュラム研究としてリテラシー教育の再構築をめざす研究を進めていくことが大きな課題である。

キーワード：国語教育学，国語科教育，リテラシー，カリキュラム，研究動向

1. はじめに

全国大学国語教育学会が学会創設50周年を記念して出版した『国語科教育学研究の成果と展望』（明治図書出版、2002）は、主として1980年代以降の国語教育学研究のすべての領野を網羅したレビュー集である。国語教育学におけるそれぞれの専門領野において、多くのレビューアーが広い範囲の研究論文を網羅しながら、研究の「成果」と「展望」を示している。この分野においてこれほどの規模のレビュー集が公刊されたのは初めてのことであり、この書を起点として、国語教育学研究のさらなる展開が開かれるであろうと期待される。同書は次の七つの部門で構成されている。

- I 国語教育基礎論の成果と展望
 - II 話すこと・聞くことの学習指導研究の成果と課題
 - III 書くことの学習指導研究の成果と展望
 - IV 読むことの学習指導の成果と展望
 - V 言語事項の学習指導研究の成果と展望
 - VI メディアの利用と教育
 - VII 国語科教育学研究方法論
- I では「国語教育基礎論」として、「国語科目

標論」「国語教育課程論」「国語科評価論」「国語教育思想論」の領域が設定され、それぞれについての研究レビューが収められている。IIからVは現在の「国語科」の教科構造をくみだしている諸領域のそれぞれにわたる研究の概観であり、VIはIIからVまでの各部門と関連を持ちながら、とくに現在の国語科教育においてその必要性が強く意識されてきた「メディア」の扱いに関する研究を概観する部門である。またVIIは、国語教育学の研究の枠組みを問題にする部門であり、「理論的研究」「歴史的研究」「比較国語教育学的研究」「実践的・実証的研究」という四つの相の「研究方法」の特性を吟味する論考を収め、また、国語教育学研究を新たに展開させる可能性のある「関連諸科学」として「ナラトロジー（物語論）」「コミュニケーション論」、語用論・認知言語学・談話研究・記号論などの「新しい言語学」、「読者反応批評論」それぞれが国語教育学研究の方法論としてどのように貢献するのかという、その可能性と将来への研究の展望が示されている。また、この部門には国語科教育学を大学・大学院で「教育」する上で重要な問題を、国内の大学での卒業論文指導及びアメリカの大学院での博士論文指導を論じた論考

が収められている。

本稿では、できるだけこの『国語科教育学研究の成果と展望』のレビュー内容との重複を避けるために、『成果と展望』の各レビューが主として2000年までの研究を対象としたことを受け、1990年代の研究動向を視野に入れながら、1998年から2002年に至る最近5年間の国語教育学における研究の動向を、全国大学国語教育学会の機関誌『国語科教育』掲載論文を中心に概観する（国語教育学分野の全国的な学会誌には『月刊国語教育研究』（日本国語教育学会）、『読書科学』（日本読書学会）、『日本文学』（日本文学協会）等があり、相当数の国語教育学関係論文が掲載されているが、本稿では紙幅の関係で、『国語科教育』掲載論文を中心にすることとした。）。

2. 「国語教育」の個人的側面と社会的側面 —国語教育学を捉え直す視点—

桑原隆(2001)は、現代アメリカの国語教育研究論文における論題の分析を通して、そこに「社会(学)的視点」が少なからず見受けられることを取り上げている。桑原は「戦後の国語教育」が「個人を重視してきた」反面、「社会的側面が軽視されてきたのではないか」という問題提起をおこなっている。G.H. ミードを踏まえながら、「多数の他者との有意味シンボルを介した相互行為」の必要性を説く教育社会学者・門脇厚司の論や「水平文化(horizontal culture)の集団や人間同士を超えた、異質な文化や人間関係における出会いや学習」の必要性、年齢の枠を超え相互協力を行いながら学習するためのグループ分けの必要性を唱えるアメリカのポイヤール報告の所説を引きながら、「言語文化の継承・発展、豊かな語彙の習得、豊かなコミュニケーション能力の育成、等々、国語(科)教育の根源的な目標を達成していく実践的方法論」開拓の重要性を指摘している。

これは田近洵一(2001)が指摘している「教育実践の科学的・実証的研究—教育実践学の確立」、「制度としての教科の見直し—教科(国語科)教育学の再構築」, 「脱学校の言語・言語文化教育—言語・言語文化教育学の開拓」, 「全国的な調査・研究, および情報・資料の収集の交流—研究のた

めの基礎作業」という四つの課題のうち、とくに三番目の「脱学校の言語・言語文化教育」という課題と深くかかわる。

「国語教育」と「日本語教育」とのかかわり、もしくは、「日本語教育」の立場からみた「国語教育」の相対的捉え直しについて論じた甲斐睦朗(2001)の指摘した諸点も、桑原の言う「社会(学)的視点」からみたときに逸することができない問題を提起したものである。これは、田近(2001)の言う「脱学校」という視座にもつながる問題である。このような見方にしたがって「国語教育」を捉え直したときに、学習者の多様性(diversity)を意識しながら、「日本語」の「学び」をどのようにすることができるのかということが、大きな課題となる。

3. 「国語教育」の歴史記述

—近現代日本のリテラシー形成過程への問い—

「国語教育」の歴史を論じた論文は、1998年以降の『国語科教育』掲載の論文中29編を数える。これは掲載論文全体の四分の一に当たる数である。明治期の国語教育を扱っているものに、石毛慎一(2002)小笠原拓(2001)渡辺通子(2000)高木まさき(2000)森田信吾(2000)牛山恵(2001)がある。いずれも「国語」科成立の前後の状況を捉えながら、「国語」科の教育が何をめざすものとして形成され始めたのかということに焦点を当てた論考である。小笠原、渡辺、牛山の各論文はそれぞれ「国語」概念の形成、読本における「コミュニケーション・スタイル」の分析、読本に見られる「ジェンダー」意識の批判的考察, をおこなっている。

「大正期」の国語教育に関しての掘り下げも、国語教育実践を支えるものを探るかたちで展開された。木村勇人(1999)は「国語副読本」の果たした役割を、当時の文芸思潮や片上伸の『文芸教育論』などのかかわりのなかで論じ、そのことが時代社会によって形成される「文学」観・「教育」観を反映したものだとしている。桑原哲朗(2000)(2001)は、綴り方教師としての芦田恵之助における「教師修養論」を考察した。桑原の研究は歴史上の good teachers の個体史における教師として

の専門的力量形成に光を当てたものであると位置づけることができる。飯田和明(2000)は小砂丘忠義の綴方教育思想を取り上げ、そこに見られる「他者」概念に着目した。特に小砂丘の所説における「動く」という言葉に目を向け、この言葉を小砂丘の「他者」受容のスタンスとその思想の核心を捉える鍵としたところに大きな特色がある。西川暢也(2001)は「三読法」成立の根拠を、『読方教育』誌上で展開された石山脩平『教育的解釈学』をめぐる議論のなかに探ろうとした研究である。「読み」の学習を能動的にする契機としての「批評活動」の重要性を指摘した坂本豊の論を石山の論とのかかわりのなかで位置づけている。

歴史研究のなかで扱われている時期に注目すると、とくに多いのが「国民学校期」前後と、昭和20年代である。

有働玲子(1998)黒川孝広(2001)棚田真由美(2001)(2002)昌子佳広(2002)のそれぞれの論文は、文献を手がかりとして「国民学校期」に営まれた「国語教育」の実際を探ろうとするものである。国家意識がきわめて強くはたらいた時期に、「国語」がどのように教えられてきたのか、「国語教育」の目標やその目標に照らして「教材化」がどのようにいとなまれたのかということを見通していこうとする諸論文である。

昭和20年代の「国語教育」に関しては、坂口京子(2001)(2002)河野智文(2002)幾田伸司(1998)小久保美子(1999)小山恵美子(1999)の論文が掲載されている。「国民学校期」と同様に、この期においても「新教育」の名のもとにどのような「国語教育」が形成されようとしたのかということについて、各論文が丹念な考察を展開している。加えて、この期の「国語教育」のあり方は、1990年代後半以降の「国語教育」のあり方と重ね合わせることのできる部分も少なくはない。

「国民学校期」に焦点を合わせた諸研究と「昭和20年代」に焦点を合わせた諸研究をあわせ読むと、「国語教育」における戦前・戦後の連続性と変化との両面を強く考えざるを得ない。

昭和30年代以降の「国語教育」の展開に焦点を当てた諸論文は、いずれも現在の「国語教育」における問題の根源をたどるところ大きな特徴がある。中村敦雄(1999)は「文章構成法」の

提唱者森岡健二の理論構築過程に目を向けている。また、大内善一(1998)は青木幹勇が小学校で展開した「書くこと」の指導の軌跡をたどり、鈴木慶子(2001)石津正賢(2001)はそれぞれ大村はまが中学校で展開した「習字」及び「伝記」を「読むこと」の指導に光を当て、大村の国語教育実践の切りひらいたものについて考察を加えている。

また、ラウンド・テーブル企画の提言であるが、浜本純逸(1999)は「戦後新教育(単元学習)の歴史的検討」と題して、戦後国語教育の内実を明るみに出し、それを検証することが現代の「国語教育」のあり方を問うことになるという問題意識につらぬかれている。

「国語教育」の歴史研究がなぜ必要になるのか。この問いはこれまでも国語教育学研究のなかで繰り返されてきた問いである。上記の諸論文を概観するなかで、強く感ぜられるのは、リテラシーの教育を人がその社会歴史的な脈のなかでどのように用いてきたのか、ということである。少なくとも「歴史」に焦点を当てた研究を進める上では、このことを意識しないわけにはいかないだろうし、その意識こそが「国語教育」の歴史研究による「現在」の問いかけを呼ぶのである。

4. 比較国語教育学研究の新しい展開

—記述・併置をふまえた比較研究へ—

1970～80年代に展開されてきた比較国語教育学研究の成果を基礎にした研究も蓄積されつつある。英国・米国・ドイツ・スペイン・中国・韓国それぞれの国語教育の実情が報告されつつある。文献中心に外国の「国語教育」を報告するものにとどまらず、それぞれの地域での「国語教育」の実際を調査し、それを報告する研究が蓄積されつつあることは重要なことである。

たとえば付宜紅(2000)は日本と中華人民共和国のそれぞれの初等教育段階の児童に同一教材(新美南吉「ごんぎつね」)を読ませ、その反応を比較考察したものである。

朴柔培(1999)は韓国の初等学校(小学校)教科書の分析を通してその「話しことば」指導の実際について独自の考察を展開した。中華人民共和国の「国語教育」に比して韓国の「国語教育」に関

しては、その紹介自体が学会レベルでは少なかったものであるだけに、貴重な論考である。

佐渡島紗織(1998)(2000)(2001)は、それぞれアメリカ合衆国・イリノイ州での「作文」について、州の到達度テスト・教師及び児童へのインタビューなどをもとに調査・分析をおこなったもので、必ずしも比較国語教育学としての関心から記されたものではないが、アメリカにおける州レベルでの作文指導の実態を報告する論文となっている。

土山一久(1998)中島香緒里(1998)安直哉(1998)長田友紀(2001)もそれぞれドイツ・イギリス・アメリカ合衆国それぞれの「国語教育」の現状を報告する論考である。これらの論考は、いずれも単に「制度」の調査報告なのではなく、それぞれの国が「国語教育」を推進するうえで重要な課題としていることを探っているところに特色がある。

比較国語教育の研究も、歴史研究と同じく、「現在」の日本の国語教育を直接の対象としているわけではない。しかし、このような研究は、それがそれぞれの国の「国語教育」の特色を明るみに出すものであればあるほど、それを読む私たちは暗黙のうちに日本の「現在」のことを意識せざるをえない。日本の「現在」において進行しつつある「国語教育」の姿を、相対的に捉え、将来の道を考えていく上でこうした比較国語教育学研究を、地道に継続していく必要があるだろう。

また、上に記した国・地域以外の「国語教育」の姿を明るみに出す研究も進めていく必要があるだろう。わずかに足立幸子(2002)が「読書へのアニメーション」の成立過程を論じるなかで、スペインにおける「国語教育」の現状に言及している以外、この数年の間に学会誌レベルでは、上記以外の国の「国語教育」について報告は見られない。英語圏であっても、オーストラリアやカナダ、ニュージーランドなどの英語を中心とした言語教育・文学教育なども調査していくと、英米のそれとは異なった問題意識や事情が明らかになるであろうし、それはまた「英語」を中心とした言語的多様性の問題にも触れていくことになるだろう。他の言語の場合も同じである。この領域の研究が「言語政策」論と密接に関わる問題であることも確かである。その意味で「国語教育」とは何かということを私たちが認識するゆたかな手がかりを

もたらす研究領域として、今後も大きな可能性を秘めている領域であると判断することができる。

5. 授業を語ることばと学習者理解の方略をもとめて

—授業研究・教師研究・学習者研究—

国語科の授業研究についての探究が継続されてきたのも、この数年の大きな特徴である。既に前記『成果と展望』においても、少なからぬ提案が為されていた。従来の授業研究と大きく異なるのは、教室での「発話」の分析の方法と、教師—生徒間の関係の把握、及び授業研究に関わる者の関わり方の問題に焦点が当てられてきたということである。

有元秀文(1998)及び(1999)は、いずれも教室コミュニケーションの問題に焦点を絞ったものである。いずれも教室における発話の生成をいざなうことが国語科授業を変え、教室共同体を変えるのだとする提言を含む。

読むことの授業に関わる研究においても、木村勝博(1999)井上雅彦(2000)松本修(2001)はいずれも、読むことがどのような行為を授業においていざなうのかという問題意識に根ざした研究である。この点は前記の有元論文と問題意識を共有したものとみなすことができる。同様に吉川芳則(1998)も、子どもを言語行為にいざなうかたちの説明的文章の読みの授業のあり方を問うている。

冒頭にとりあげた桑原(2001)の「社会(学)的視点」は、このようにわが国の国語科授業研究においても重要な視点として、既に学会誌レベルの論文群のなかにも確実に看取されるものであるといえることができる。

教室の社会的文脈に重きを置く方向での理論的な基礎を問うた論文が藤森裕治(2001)である。藤森は授業コミュニケーション研究への「社会システム論」の導入の可能性を論じ、授業コミュニケーションにおける「ゆらぎ」をどのように捉えるのかということ、いわゆる「複雑系」の科学哲学を参照しながら考察を深めている。

授業研究は、当然のことながら教師研究・学習者研究と深くかかわる。世羅博昭(2001)は「中等国語科授業実践理論の構築のための綿密な考察を

行い、教師研究と授業研究の接続のかたちを示した。1999年夏の学会シンポジウムの提言を集約した望月善次(2000)大内善一(2000)小林則子(2000)は、いずれもシンポジウムのテーマ「子どもを見つめ育てる国語科授業」に依じて、教師の学習者理解とそれにもとづく授業の創造に必要なことを論じている。森美智代(2001)は教師が学習者にどのように向き合うのかという問題を考察する。「私」が相手を「他者」ととらえ「対面」ということが果たされない限り「聞くことの学び」は起こらないという指摘は、教師の学習者理解、授業研究者の教師・学習者理解、など教育活動のさまざまな場面での「他者」理解を営む上で重要な問題提起となっている。また、藤原頭・遠藤瑛子・松崎正治(2002)は、「ライフストーリー」アプローチを採用しながら、一教師が単元や授業を生み出していくばあい、どのような出来事が起こるのかということの詳細に検討した。

6. 言語発達を促す要因の解明 —学習者研究・発達研究—

寺田守(2001)は「読むこと」の授業における中学生の読者反応の個人的・社会的構成の過程に目を向け、学習者の読むという行為を促す力とは何かという問題を実証的に探っている。河野順子(2001)も、「メタ認知の内面化モデル」にもとづきながら、説明的文章学習者の学習過程で「メタ認知」能力がどのように「内化」されるのか、あるいは大人(教師)のどのような働きかけによって、子どもが「メタ認知」能力を獲得していくのかという問題を扱ったものである。同様に酒井千春(2000)も、中学生の小グループの話し合い形成過程を実証的に考察した。グループでの話し合いが営まれる上での条件を会話分析データをもとに探り、会話に参加する者の「メタ認知」能力が「個人間」の調整を促す要因となることを論じた。

これらの諸研究は、国語科授業研究において、教師・学習者各々の「認知」のドラマをどのように捉えていくのかという問題意識を共有している。

中西淳(1998)による「作文鑑賞力」の発達研究、牧戸章・難波博孝(1998)の「言語活動」の発達の「契機」とそのすじみちについての考察は、間瀬

茂夫・難波博孝・長崎伸仁・河野順子・植山俊宏(2001)や住田勝・山元隆春・上田祐二・三浦和尙・余郷裕次(2001)などに展開されている、ことばの力の「発達」に関する実験的・実証的研究とともに、今後もカリキュラムを考えていく上での基礎研究として重要なものになっていくであろう。これらの研究が示唆するように、「発達」の問題は、単に加齢に伴う変化というだけにとどまらない問題である。調査等を通じて得られたデータをもとにして、学習による質的な変容の契機をどのようにつかみだすことができるのかということが、この方面での研究の今後の課題となるだろう。なお、上記の発達研究は、大槻和夫編『国語科教育改善のための国語能力の発達に関する実証的・実践的研究Ⅰ』(1998, 科学研究費補助金報告書)や吉田裕久編『国語科教育改善のための国語能力の発達に関する実証的・実践的研究Ⅱ』(2000, 科学研究費補助金報告書)の研究の成果を基礎にしたものである。そういう意味で、共同研究による授業研究・発達研究をどのようにきりひらいていくのかということも、これからの課題であると言える。

7. 国語教育にとって「教材・学習材」とは何か —教材論・教材研究論—

藤森裕治(1998)は従来「教材」として捉えられてきた「国語科学習材」をどのように考えていけばよいのかという視点を示している。これは有沢俊太郎(2002)と問題を共有する。有沢は「教材・学習者論」を「教師の側から・学習者の側から国語(言語)資料を扱う」こととし、「指導研究」と「学習研究」の媒介として「教材・学習材」論を捉える上記藤森論を肯定的に評価している。この藤森・有沢両者の提言は、教科教育学における「教科内容学」の役割に言及したものであると捉えることもできるだろう。

いわゆる「教材価値」に焦点化した研究として、三好修一郎(1999)、中嶋真弓(1999)、村上呂里(1999)がある。それぞれ従来の国語科教育において用いられてきた作家作品の持つ、新しい教材性・教材価値を、綿密なテキストの読解を踏まえて明らかにしようとする試みである。ある文章が「教

材「学習材」となる条件の解明へと向かうこの種の研究は、国語教材・国語教科書の史的研究とも深くかかわり、私たちが国語という教科において何を教えてきたのか、あるいは何を教えようとしているのか、ということを読み解き明かす可能性を持っている。

間瀬茂夫(1999)はそのことを共時的に捉えようとした研究である。国語科教師に対するアンケート調査の結果の分析を中心としながら、「説明的文章」の指導にあたる教師側の「説明的文章」の教材観を問題にしている。

8. リテラシーを育む足場づくりをめざして —学習指導法・カリキュラムの研究—

佐倉義信(1999)は、日本作文の会の資料をもとにしなが、児童の表現力の向上をはかるためのカリキュラムモデルを提案している。詩的感動を引き出す装置として「気づく(発見)」「重ねる(比喩)」「つなぐ(連想)」「しぼる(焦点化)」「離れる(想像)」の五つの「基本的な能力」が取り上げられているところに特徴がある。

光野公司郎(2002)は、わが国において近年注目されはじめた「メディア・リテラシー」の教育を「批判的思考力」の育成をめざして、中学校第二学年での説明的文章指導にかかわって「批判的思考力」を育成するためにこの領域に注目したものである。また間瀬茂夫(1998)は、説明的文章指導領域の考察を中心としなが、読みの学力の一部を為すものとして「暗黙の推論」をおこなう力を取り上げている。

矢部玲子(2001)は「常用漢字」をどのようにカリキュラムに位置づけるかという問題を「要継続指導漢字」に着目して扱い、外田久美(2001)は中学生の「誤字」の実態分析を行っている。矢部と外田の研究はリテラシー教育の根底を問うものとなっており、国語科教育課程のバックボーンに当たる問題を探ったものである。

これらの論考は、有沢俊太郎(1998)とともに、国語科学習指導を通じてどのような力を育てていく必要があるのかということ論じ、国語科という教科のカリキュラムを構成していくための基礎的な問題を扱ったものであるということが出来る。

9. おわりに—リテラシー教育の再構築—

『国語科教育』には全国大学国語教育学会におけるパネル・ディスカッション及びラウンド・テーブルの報告も掲載されている。そこには、学会として取り組んできた課題が示されている。1997年度以降の学会におけるパネル・ディスカッション及びシンポジウムと課題研究の話題を掲げると次のようになる。

パネル・ディスカッション及びシンポジウム

第92回(1997年8月)「国語科教育における教科内容編成の検討」

第93回(1997年11月)「授業研究のあり方—物語・小説教材をとりあげて—」

第94回(1998年8月)「21世紀の国語教育を考える」

第96回(1999年8月)「国語科と総合学習」

第97回(1999年10月)「子どもを見つめ育てる国語科授業」

第98回(2000年8月)「国語教育学研究の課題と展望—本学会50周年を記念して—」

第99回(2000年10月)「21世紀の社会を生きる国語の力」

第100回(2001年5月)「国語教育の過去・現在・未来」

第101回(2001年10月)「『国語教育』か『日本語教育』か、それとも…—日本語国際化への対応—」

第102回(2002年5月)「国語科教育とメディア・リテラシー」

第103回(2002年10月)「21世紀にいきる国語教育実践学の構築に向けて」

課題研究

第92回(1997年8月)「国語教育研究における研究パラダイムの検討」

第94回(1998年8月)「聞く・話す生活をどうひらくか」

第95回(1998年10月)「人間と言葉とのかかわりをふまえた国語教育—文学および文学の授業の可能性を探る—」

第96回(1999年8月)「国語科授業研究の新しいパラダイム」

第98回(2000年8月)「国語科教育研究の歴史と展望」

第99回(2000年10月)「国語科教育研究の歴史と展望」

第100回(2001年5月)「第1分科会：主題＝国語科教育学研究のこれまでとこれから1」「第2分科会：主題＝国語科教育学研究のこれまでとこれから2」「第3分科会：主題＝カリキュラム作りの内容と方法」

第102回(2002年5月)「国語科教育課程の歴史的研究」

ここには、この5年間にわたる国語教育学研究の関心の推移がある程度まで反映されていると見てよいだろう。「学」の研究内容と研究方法論についての議論は、常に意識されてきているが、その研究がどのようなかたちで「これから」の国語教育実践を切りひらく力になりうるのかということが問われていると言ってよい。とりわけ、教員養成・教師教育カリキュラムに、国語教育学研究の成果をどのように反映させるのかということは大きな課題であり、より具体的な提案に向けての試みが継続されている。

広義の「リテラシー教育」の内容と方法をもとめていくこと、すなわちこれまで「国語教育学」と呼ばれてきたものを、「リテラシーの教育学」として捉え直していくこともまた重要なことであると言えるのではないか。「基礎学力」への問い直しが喧しく議論されるなか、将来の社会をかたちづくるために「リテラシー」の根幹をどのように考えていけばよいのか、というその問いをもとめつづけていく責務を、カリキュラム研究の一翼を担う領野としての国語教育学は担うのである。

文献(論文著者、発表年、論文題目、『国語科教育』の号、の順に掲げてある。本文で言及していないものも含まれている。)

白石寿文, 1998, 国語科教育研究を進めるうえで大学・学部と附属学校等実践校との連携はどうあればよいか, 45.

笠井正信, 1998, 国語科教育研究を進めるうえで大学・学部と附属学校等実践校との連携はどうあればよいか, 45.

間瀬茂夫, 1998, 説明的文章の読みの学力における暗黙の推論の位置, 45.

有沢俊太郎, 1998, 読書カリキュラム編成の原理

について, 45.

大平浩哉, 1998, 教科の構造改革と精読主義の克服, 45.

府川源一郎, 1998, 国語科教育における教科内容編成の検討, 45.

藤森裕治, 1998, 国語科学習材の概念規定に関する一考察, 45.

小林一仁, 1998, 教員養成系大学/大学院における国語教育の研究と教育はどうあればよいか提言1, 45.

中冽正堯, 1998, 教員養成系大学/大学院における国語教育の研究と教育はどうあればよいか提言2, 45.

森田信義, 1998, 研究成果の蓄積と共有化をどうはかるか 提言1, 45.

市川真文, 1998, 研究成果の蓄積と共有化をどうはかるか 提言2, 45.

中西 淳, 1998, 作文鑑賞力に関する発達的研究, 45.

牧戸章・難波博孝, 1998, 言語活動の発達の契機と過程, 45.

土山一久, 1998, 国語科における「統合性」の問題, 45.

中嶋香緒里, 1998, 言語的多様性への対応と国語教育論の展開, 45.

佐渡島紗織, 1998, アメリカ・イリノイ州の作文到達度テスト, 45.

有働玲子, 1998, 国民学校期の音声言語, 45.

大内善一, 1998, 青木幹勇国語教室の「書くこと」に関する考察, 45.

幾田伸司, 1998, 教科書教材から見た昭和二〇年代前期の詩教育, 45.

有元秀文, 1998, 共同体を変える道具としての教室のスピーチジャンル, 45.

吉川芳則, 1998, 説明的文章の学習活動を改善するための一考察, 45.

難波博孝・牧戸章, 1999, 本当に必要なことばの力とは何か, 46.

佐倉義信, 1999, 児童詩創作指導カリキュラムの開発に関する研究－「基本的な能力」とその要素を中心に－, 46.

中西一弘, 1999, 教員養成大学の将来像をさぐる, 46.

- 汐見稔幸, 1999, 共振する身体とことば—21世紀の国語教育について—, 46.
- 浜本純逸, 1999, 戦後新教育(単元学習)の歴史的検討—その課題と方法—, 46.
- 三好修一郎, 1999, 新美南吉「ごん狐」の読みと教材性, 46.
- 中嶋真弓, 1999, 芭蕉『おくのほそ道』における教材価値の研究—中学校・高等学校の比較を通して—, 46.
- 村上呂里, 1999, 「どんぐりと山猫」(宮沢賢治)の読みと授業の可能性, 46.
- 間瀬茂夫, 1999, 国語科教師の持つ説明的文章の論理のとらえ方と指導理論に関する研究, 46.
- 有元秀文, 1999, 「活発に討論する授業」をどう創造するか—コミュニケーションを核とした「総合的な学習」—, 46.
- 木村勝博, 1999, 文学の授業と「他者」—「読む」文学から「する」文学へ—, 46.
- 朴 柔培, 1999, 韓国における話しことばの指導—初等学校(小学校)の教科書の分析を中心に—, 46.
- 須貝千里, 1999, 問題の焦点としての「〈他者〉との出会い」—くわたしのなかの他者〉の問題化と自覚を—, 46.
- 塚田泰彦, 1999, 学習者のテキスト表現過程を支える21世紀のパラダイム, 46.
- 松崎正治, 1999, 異質性を共に生きる社会的実践としての「国語」科教育, 46.
- 中村敦雄, 1999, 「文章構成法」の理論構築過程に関する—考察—昭和三十年代における森岡健二の所説を中心に—, 46.
- 小久保美子, 1999, 国語教育における「経験主義」の指導原理—バージニア初等学校コース・オブ・スタディの検討を中心に—, 46.
- 島村直己, 1999, 国定小学校用国語教科書の語彙—使用度と共通度を中心に—, 46.
- 小山恵美子, 1999, 昭和二十年代における小学校国語検定教科書の検討, 46.
- 木村勇人, 1999, 大正期における「国語副読本」の研究—「国語副読本」に見る「文学」と「教育」の接点—, 46.
- 大槻和夫, 2000, 国語科と総合学習の区別と関連, 47.
- 平野朝久, 2000, 総合学習による教育改革, 47.
- 首藤久義, 2000, 二重カリキュラム的総合単元論—教科をこえて広がる国語—, 47.
- 井上雅彦, 2000, 「伝え合う力を高める」国語科学習指導—高等学校3年間の学習計画—, 47.
- 望月善次, 2000, 考察枠設定こそが課題, 47.
- 大内善一, 2000, 子どもを見つめて育てる国語科授業の創造—小学校「書くこと(作文)」の領域に即して—, 47.
- 小林則子, 2000, 子どもを見つめ育てる国語科授業—チームティーチングによる授業改善—, 47.
- 舟橋秀晃, 2000, 「論理的」に読む説明的文章指導のあり方—『国語教育基本論文集成』所収論考ならびに雑誌掲載論考にみる「論理」観の整理から—, 47.
- 佐渡島紗織, 2000, 構造を教える作文授業の有効性—インタビューと作文評価による米国イリノイ州での調査—, 47.
- 藤井知弘, 2000, 読者反応研究から授業化への視点, 47.
- 酒井千春, 2000, 話し合いの生成過程に関する—考察—個人間の調整を促す要因を中心に—, 47.
- 付 宜紅, 2000, 日中両国における子どもの読みの比較研究—『ごんぎつね』の場合—, 47.
- 小川雅子, 2000, 国語科教育における「内的言語活動」の位置づけ, 47.
- 高木まさき, 2000, 『小学読本』巻之四・五の研究—その構成と出典の検討を通して—, 47.
- 桑原哲朗, 2000, 芦田恵之助の綴り方教師修養論に関する—考察—, 47.
- 渡辺通子, 2000, 国語教科書にみられるコミュニケーション・スタイル—田中本と榊原本の比較—, 47.
- 飯田和明, 2000, 小砂丘忠義の綴り方教育, その構造—「自己」「他者」概念の検討を中心に—, 47.
- 森田信吾, 2000, 明治二〇年代における文法教授の定着—大槻文彦『語法指南』の再評価—, 47.
- 矢部玲子, 2001, 常用漢字の教育課程に関する考察—要継続指導漢字精選の試み—, 49.
- 桑原隆, 2001, 社会(学)的視点からの言語教育論, 49.

- 井上雅彦, 2001, 国語科と「総合的な学習の時間」との連携の在り方—ある学習者の高校3年間にわたる学びとともに—, 49.
- 佐藤卓生, 2001, 21世紀の社会を生きる国語の力—言語生活を基盤とした実践を通して—, 49.
- 世羅博昭, 2001, 国語教育学研究の課題と展望—中等国語科授業実践理論の構築を目指して—, 49.
- 住田勝・山元隆春・上田祐二・三浦和尚・余郷裕次, 2001, 文学作品を読む力の発達に関する研究—〈つづき物語〉の量的分析を中心として—, 49.
- 長田友紀, 2001, アメリカにおける機能的コミュニケーション論の成立と変容—1980年代の州カリキュラムの検討を中心に—, 49.
- 深川明子, 2001, 編集力を活用した個性的な読む力の育成, 49.
- 甲斐睦朗, 2001, 国語教育と日本語教育の連携, 49.
- 田近洵一, 2001, 国語教育学研究の課題と展望, 49.
- 森 美智代, 2001, 「語られる身体」としての「聞くこと」—「聞くこと」の学びの生成—, 49.
- 松本 修, 2001, 文学の読みとその交流の実践的意義, 49.
- 西川暢也, 2001, “三読法” 成立期の論争に関わる—考察—『読方教育』誌にみる『教育的解釈学』への批判を中心に—, 49.
- 坂口京子, 2001, 教育指導者講習(IFEL)に見る経験主義国語教育の特質, 49.
- 黒川孝広, 2001, 国民学校国民科国語の成立過程に見られる言語活動意識, 49.
- 鈴木慶子, 2001, 大村はまの「習字」教育に関する考察—昭和23~25年度の場合—, 49.
- 棚田真由美, 2001, 昭和戦前期小学校国定国語教科書における『古事記』の教材化に関する考察, 49.
- 佐藤 学, 2001, 「国語」の教育から「言語」の教育への提言, 50.
- 府川源一郎, 2001, 近代国語教育の達成点とこれからのことばの教育, 50.
- カイザー, シュテファン, 2001, 日本語と漢字・日本人と漢字, 50.
- 山本建雄, 2001, 漢語名詞語彙採録の実態とそれをふまえた指導の試み—説明文教材における場合を中心に—, 50.
- 佐渡島紗織, 2001, 子どもの作文にみる相手意識—小学生へのインタビューによる調査—, 50.
- 外田久美, 2001, 中学生における誤字の実態と分析, 50.
- 小林一貴, 2001, 意見の形成における情報の固有性と共有性, 50.
- 桑原哲朗, 2001, 芦田恵之助の文章観と随意選題に関する考察, 50.
- 牛山 恵, 2001, 国語教育史におけるジェンダー—坪内雄蔵『国語読本』にみられるジェンダー形成の問題—, 50.
- 小笠原 拓, 2001, 成立過程にみる「国語科」の歴史的 성격, 50.
- 尾崎洋二, 2002, 「国語教育」か「日本語教育」か, それとも—国語教育の一門外漢として考えたこと—, 51.
- 甲斐睦朗, 2002, 「国語教育」か「日本語教育」か, それとも—日本語国際化への対応—, 51.
- 佐々木瑞枝, 2002, 日本語教育か国語教育かそれとも…, 51.
- 棚田真由美, 2002, 昭和戦前期における『古事記』の教材化に関する考察—国民学校高等科の場合—, 51.
- 坂口京子, 2002, 占領下教育改革における経験主義国語教育の特質—『小学校国語学習指導の手びき』を中心に—, 51.
- 寺田 守, 2001, 学習者の読むという行為を推進する力とは何か—中学生の読者反応にみるテキスト間の関連性に着目して—, 51.
- 間瀬茂夫・難波博孝・長崎伸仁・河野順子・植山俊宏, 2001, 説明的文章の読みの発達—小学校高学年から中学年にかけての変化を中心に—, 51.
- 石津正賢, 2001, 大村はま国語科授業実践の研究—「伝記」の学習指導を中心に—, 51.
- 小川雅子, 2001, 「学習者主体」の内実を問う, 50.
- 藤森裕治, 2001, 予測不可能事象—授業コミュニケーション研究における社会システム論の導入—, 51.
- 藤井知弘, 2001, 国語科授業研究における質的研究法の意義, 51.
- 河野順子, 2001, 説明的文章の学習指導改善への提案—「メタ認知の内面化モデル」を通して—,

51.
 光野公司郎, 2002, 国語科教育におけるメディア・リテラシー教育－説明的文章指導(中学校第二学年)においての批判的思考力育成の実践を中心に－, 52.
 中西一弘, 2002, 教育内容・方法論としての国語教育実践学の在り方, 52.
 有沢俊太郎, 2002, 教材・学習材論から21世紀の国語教育実践学を考える, 52.
 浜本純逸, 2002, 教師論・学習者論から21世紀の国語教育実践学のあり方, 52.
 安直哉, 2002, 学力評価室の中等音声国語評価に関する考察, 52.
 大槻和夫, 2002, 目標論・評価論としての国語教育実践学の在り方, 52.
 昌子佳広, 2002, 昭和前期における読み方教育史に関する一考察－国民学校期への移行を中心に－, 52.
 河野智文, 2002, 文学教材の取り扱いからみた昭和二十年代経験主義国語科教育の特質, 52.
 石毛慎一, 2002, 近代における前期中等漢文教育の史的展開－日本漢文を中心として－, 52.
 足立幸子, 2002, 「読書へのアニメーション」の成立, 52.
 藤原顕・遠藤瑛子・松崎正治, 2002, 遠藤瑛子実践における単元生成の文脈－国語科教師の実践的知識へのライフストーリー・アプローチ－, 52.

A Research Trend and the Prospects of Japanese Language Education Studies

by

Takaharu YAMAMOTO

Graduate School of Education, Hiroshima University

With this report, I grasped a study trend of Japanese language education studies mainly on articles from “Kokugo-ka-Kyouiku(Japanese Language and Literatue in Education)” carried 1998 to 2002 and surveyed a study.

Characteristics of researches was found as follows, 1) Accumulation of a study of the history of a literacy formation process being seen in studies of history of national language education, 2) In comparative studies on first language education studies, most researchers represented descriptive studies of a contry, but a few researchers made comparative studies of two countries' first language education. This would be a germ for further studies in future. 3) Reclamation of a study method of proof having been done about class study / teacher study / learning person study / development study each, 4) An examination about teaching materials value in Japanese language instruction having been pushed forward, 5) Some studies to investigate a constitution principle of a Japanese language curriculum as a scaffold nursing literacy was pushed forward. It is a big problem to push forward a study to aim at rebuilding of literacy education and research as letting the teacher training/ teacher education curriculum of Japanese language and literature reflect accumulated results of research and curriculum studies.